

Letter from TOZANSO

2025年



東山花だより

2025年7月1日発行
発行人：森田義彦
編集人：阪田祥章
公益財団法人 日本YMCA同盟
国際青少年センター 東山荘
〒412-0024
静岡県御殿場市東山1052
Tel 0550-83-1133
Fax 0550-83-1138
www.ymcajapan.org/tozanso
(題字は故北村徳太郎氏)

YMCA東山荘
創立110周年

国際基督教大学

ICUの誕生 「御殿場会議」

1949年6月14日～16日 於 YMCA東山荘

1915年に夏季学校としてスタートしたYMCA東山荘は110年の歴史の中で、日本キリスト教史上、数多くの重要な会議が開催されてきた場でもありました。今号では、戦後、国際基督教大学（ICU）が正式に創立される場となった「御殿場会議」（1949年6月）に焦点を当てたいと思います。ICUが、それまで日本になかった全く新しい使命と性格を持つ「明日の大学」として三鷹の地に献学されたのは1952年4月でした（四年制教養学部大学として発足したのは翌1953年4月）。しかし、正式に創立が決定されたのは1949年6月15日、YMCA東山荘を会場に開催された「御殿場会議」においてでした。今から80年前、日本の敗戦という大きな出来事をきっかけに、キリスト教精神に基づく総合大学の建設という壮大にして積年の夢が、現実のものとなるべく動き出しました。

写真：「御殿場会議」で歓談する（左から）ダーギン、ディッフエンドルファー、秩父宮雍人親王、齊藤惣一。所蔵：ICUアーカイブズ

東山荘と私

ICU特集

今号では、ICUと東山荘の双方にゆかりのある方に「東山荘との思い出」のご寄稿をお願いしました。文章をお寄せいただきありがとうございました。

国際基督教大学入学のいきさつ

羽鳥 玲子

1945年、東京中野区で小学校を卒業しました。父の転勤で、大阪豊中の梅花学園中学部に入学、家から歩いて3分の所にありました。当時懂れていた高等部の上級生が、開学したばかりの国際基督教大学（ICU）に入学したと知り、ICUに憧れを抱きました。

私の高等部卒業を目前にして再び父の転勤により東京に戻り、卒業と同時にICUに行き



羽鳥直之さん・玲子さんご夫妻（2008年12月「年末年始家族パーティー」にて）。

たいと当時全国にある基督教主義学校で、一校一名の推薦入学があり応募。日本語、日本語、英語の面接入試をうけ、入学を許可されました。何をどう会話したか、記憶にはありません。自分では落ちついて堂々としていました。入学に当って父親は良く認めてくれました。割に進取の気概があったと思います。私に卒業後すぐ嫁に行けとは言わず、何かさせたいと思っていたようです。私が男だったから良かったと思っていたようです。

さて、東山荘とのつながりは？全国基督教主義中学高校生の集い（修養会）出席の為、梅花から代表の一人として参加したことが始まりです。一週間位滞在したかしら？古いキャビンか本館二階だったかしら？ざこ寝だったか？食事がうれしかった

ただ記憶しています。

そしてICUへ、入学式から半年以上は高校のセーラー服のままでした。4年間の楽しい大学生生活でした。三年時、三鷹にあった武蔵野YMCAから未就学児に英語を教えるリーダー募集があり、応募し、子供達にABCを教え遊んで半年あまり、主事補で担当者の夫直之とも出会いました。

終戦時、日本領であった台湾省台南市長だった羽鳥又男氏がYMCA同盟の委員をしており、東山荘にも関係してらして、直之の父親であると後に知ることとなりました。引き揚げ後、文部省の依頼をうけ、又男氏はICU設立の土地探しをしており、45万坪の土地収容に成功していました。それを知った父は直之との結婚を許してくれ、直之と結婚しました。なき山一証券の東京支店長をしていた父らしいOKでした。そんなこんなで東山荘ともずっと近くなり、中学高校時代から結婚、YMCA家族キャンプなどかわってきました。

ある冬の寒い朝、東山荘黙想館の床に足をおいて、何と冷たいことか？ヒーターをつけても温まりません。何か敷物があれば！と思いつき、集まっていた食堂で募金を呼びかけて袋をまわしました。思いつくともすぐ

に実行せねばいられない性格のなせる行為でした。私も持ち合わせた二万円あまり入れたかしら？ 始まりの一步が必要ですから。幸いさっそく六万円程集まりスタッフさんに依頼しカーペットを敷いて頂きました。

ホッ！として朝礼が可能となりました。いちとしよりの思い出の一端を書きました。今思うと、何の深い考えもなく、思いつくままに生きてきたような人生を許して下さった神様に感謝しかありません。

学問について人生について語り合う学びの場

ICU教授 佐野 好則

私が東山荘に深く親しむようになったのは、この地で開催されたペディアヴィウム会の研修会を通じてでした。ペディアヴィウム会とは、私が学部生時代を過ごし現在奉職している国際基督教大学（ICU）の草創期に新約聖書学および西洋古典学を担当された神田盾夫先生とお連れ合いの多恵子様の人格教育によって薫陶を受けた当時の

学生さんたちが立ち上げた学術親睦団体です（「ペディアヴィウム」はラテン語で、イエス・キリストが自ら弟子の足を洗い清めた「洗足」のこと）。東山荘でのペディアヴィウム会の一泊二日の夏の集会に私は一九九八年より十年あまりほぼ毎年参加しました。

ペディアヴィウム会の夏の集会では、聖書について、キリス



「御殿場会議」で歓談する神崎驥一氏（左）とディッフェンドルフアー氏（右）。背後は木造時代の本館講堂（所蔵：ICUアーカイブズ）



東山荘で野球を楽しむ神田先生 (『神田盾夫著作集2』月報(みすず書房)より)

ト教について、ギリシア・ローマ古典について、文学について、思想について、また社会の様々な分野での貢献についての講演を聞き、それらをもとに活発なディスカッションを行い、また遠隔の地から集まった方々も含め交流を深めました。富士山を仰ぐ豊かな自然風景の中で、世代を越えた交わりを通じて、教養とは人と人とのつながりの中にあるべきものという感覚が私の中に育てられたと思います。留学を終え若手教員として試行錯誤しつつ大学での教育に取り組み始めた時期の私にとって東山荘はかけがえのない経験の場となりました。

わっていた方々がそこに集いました。ICUアーカイブズのホームページには、御殿場会議に参加した方々の集合写真に加え、会議中の様子、さらには東山荘の樹々に囲まれ明るく開放感にみちた敷地の中で、一対一や小グループで散策しながら、時にはこやかに親睦を深めつつ、時には真剣な表情で語り合う方々の姿を写した貴重な写真

東山荘に感謝を込めて

ペディラヴィウム会 水島 陽子

が収められています。私が若き日を過ごした今若い方々とともに学問について人生について語り合う学びの場がこの御殿場会議で備えられたことを思うとき、東山荘の運営に携わる方々が豊かな自然の中で暖かく人々を迎え、実り多き交わりの場を提供する意義深い活動を連綿と続けておられることに深い感謝と敬意をおぼえます。

私たちのペディラヴィウム会は、ICUの初代人文科学科長であった神田盾夫先生と多恵子夫人（そのお祖母様は御殿場にゆかりの廣岡浅子さん）と、お二人がお住まいだった御殿場は新橋に集った草創期の学生たちを中心に始まりました。その後、神田邸を拠点にしながら、講演会、修養会、子どもたちを交えた親睦の会などの開催に、一時期は毎夏のように東山荘をお借りしていました。ペディラヴィウム（洗足）とは、ヨハネ福音書のイエスが弟子の足を洗った記事に由来します。東山荘の静かな環境の中で、世代を越えた出会い、ゆたかな対話、新しい気づきに恵まれました。



東山荘で行われていたペディラヴィウム会夏の集会 (ペディラヴィウム会様ご提供)

東山荘は第二のふるさと

斎藤 大介

東山荘創立110周年おめでとうございます。

小さな頃からキャンプキッズとして東山荘にはお世話になっていた私にとって、東山荘は第二のふるさとのような場所です。

その東山荘が自分の母校でもあるICU発祥の地と知ったのは恥ずかしながら入学してからだったのですが、ゆかり深い東山荘が母校とも深く関係があったということを知り、不思議な縁のようなものを感じたのを今でも覚えています。

ICUに入学してからは、キャンプリーダーとして大学が休暇の時期には東山荘のお手伝いをさせていただいたのですが、ICUは他の大学よりも夏休みが始まるのが早く、6月後半には休暇に入るため、私にとって大学の夏休みといえば東山荘で日本各地の学校や教会などから集まる仲間たちと毎日のようにとにかく全力で遊んだ思い出ばかりです。

富士山を舞台に、砂すべりで砂まみれになったり、滝行でずぶ濡れになったり、ムササビに出会ったり、息をのむような星

空を見たり、まだまだ書ききれない思い出ばかりのあの夏は本当にかけがえのない時間だったと強く感じます。

そんな東山荘とICUは、どちらも自然豊かなフィールドに様々なバックグラウンドを持つ仲間たちが集い、語らう場であるという共通点があるように思います。ICUは昨年創立75周年を迎え、東山荘は今年で創立110周年を迎えます。多くの若人にとってかけがえのないそれぞれが場がこの先もずっと続きますように。



「こども富士登山キャンプ」でリーダーをつとめていた大介さん(左から二人目)。富士山頂剣ヶ峰にて。

ICUが誕生した「御殿場会議」

1949年6月14日～16日



木造時代の東山荘本館講堂前で撮影された「御殿場会議」集合写真。所蔵：ICUアーカイブズ（同ウェブサイトの御殿場会議特設ページには写真の詳細な説明があり、参考にさせていただきました）

敗戦・悔恨・平和――

高度な学問的水準を持つ、キリスト教精神に基づいた総合大学の建設という理想は、明治時代の1910年代にはすでに日本のキリスト教界で内発的に生まれていました。ICU創立は、まさにそのような夢の実現を目指す（国内外の）さまざまな流れが、1945年8月の日本の敗戦という大きな出来事をきっかけに、痛切な反省と平和への希求の下に、一つに合流した結果と言えると思います。

毎夏、東山荘の夏季学校に集う学生と先生たちを結び付けて理想的な大学ができないだろうか――

そして、その支流のひとつにYMCA東山荘を舞台とする夏季学校があったことが齊藤惣一の言葉から推察できます。日本YMCA同盟学生部主事だった永松克己氏は『国際基督教大学通信』に連載した「国際基督教大学建設小史」の中で、大学建設の「事の始まり」を1945年12月28日に東京女子大学礼拝堂で戦後初めて開催された学生合同礼拝に求めています。この礼拝は非常に盛り上がり、礼拝に終わったそうですが、礼拝

後、女子大会議室に当時のキリスト教指導者たちが集まりました。そこで永松氏が「今日皆様がご覧の通り学生諸君は虚脱状態より雄々しく立ち上がりました。基督教者学生の指導者として諸先生はこれにいかに対処せられる覚悟でありますか」と問題提起すると次のようなやりとりがあったそうです。「現九大教授の今中次磨先生が私はこんな夢を持っているとして新しい民主的政治学校の計画を語られた。これに対して早大の酒枝義旗先生が働きつつ若い青年のため理想的な夜学専門学校を作りたいと話されるや齊藤惣一先生が私は皆さんよりもっと大きな夢を持っている。それは総合大学を建てることである、毎夏御殿場の東山荘の夏季学校に全国より集まった有為な学生諸君とその指導者として来荘された学会の権威、諸先生を結びつけて理想的な大学が出来ないので



黙想館に掛けられている湯浅八郎の書「横眉冷対千夫指 俯首甘為孺子牛」（魯迅の言葉）

あろうかと語り出されたとき、すっかりこの会は大学新設の夢物語りに奪われた形になってしまった」。齊藤惣一はこの年の10月には既に大学創設について関係者と語り合ったり北米から派遣された代表団に表明したりしていました。

日本のキリスト教界、教会関係等の指導者が全部集まった――

このような日本国内の動きを受けて北米ではICU創立委員会等が立ち上げられ、他方、国内でも大学設立委員会（山本忠興委員長）、大学設立実行委員会（齊藤惣一委員長）等が活動を始め、大学設立の準備が具体的に進められていきました。募金活動やキャンパスの選定取得、財団法人の設立等が行われ、そうして1949年6月、YMCA東山荘において「御殿場会議」が開催され、「寄付行為」の議決、理事会（理事長東ヶ崎潔）や評議会（議長山本忠興）の成立、学長（湯浅八郎）の選出、「根本方針」の採択等がなされました。そして6月15日が「創立記念日」と決定されました。この「御殿場会議」には「日本のキリスト教界、教会関係等の指導者が全部集まった」と言われます。



湯浅八郎を校長に開かれた第56回夏季学校(1947年)、秩父宮殿下・同妃と共に。

YMCA東山荘の始まり

「夏季学校」は今…

夏期ゼミナールとして継承

1915年、学生YMCAの夏季学校の場としてスタートしたYMCA東山荘―現在は学生やYMCAに限らず、誰もがさまざまな目的で使用できる「国際青少年センター」として多くの人々に利用されていますが、

源流となった「夏季学校」は今も続いているのでしょうか。

結論から言うと、明治時代から続いた「夏季学校」は、残念ながら学生紛争の影響を受け1968年に開催された第77回で幕を閉じました。

東山荘70周年記念として1985年に発行された落合則夫著『東山荘ものがたり』（44ページ以下）によると、夏季学校は暗い悲惨な第二次世界大戦下も続けられましたが、1944年には計画は立てられたものの、前年からの学徒動員で学園には学生がいなくなり、学生YMCAそのものの活動ができなくなりました。しかし、その間も、石原謙が『開拓者』誌上において学生にメッセージを送るなど紙面開催が行われました。

一九四五年、敗戦の年は当然のことながら計画すらできず、東山荘は、沼津の兵器会社青年学校錬成道場として貸与し、からくも軍の徴用を免れました。戦後は敗戦の翌年から早速新しい希望に充ちて復活再開されました。毎回200名近い若者

が全国から集まりました。

1968年にYMCA東山荘における「夏季学校」が終焉を迎えた後は、試行錯誤を経た後、1973年より「夏期ゼミナール」としてその精神が継承されました。会場は再びYMCA東山荘になりました。以来、幾多の試練を乗り越えながら（直近ではコロナ禍）「夏期ゼミナール」は守られ、2024年に第50回の節目を迎え現在に至っています。

学生YMCAの現在

「学生YMCA（略称「学Y」）」は、全国の大学を拠点



第50回を迎えた「夏期ゼミナール」（2024年8月）

全国で活動する学生YMCA

(◎=学生寮あり)

北海道大学YMCA◎	関西学院大学YMCA
東北大学YMCA◎	(聖和キャンパス)
一橋大学YMCA◎	関西学院大学YMCA
東京大学YMCA◎	(神戸三田キャンパス)
早稲田大学YMCA◎	神戸女学院大学YMCA
京都大学YMCA◎	大阪YMCA国際専門学校YMCA
京都府立医科大学YMCA◎	活水女子大学YWCA
九州大学YMCA◎	西南学院大学YMCA・YWCA
長崎大学YMCA◎	宮城学院女子大学YWCA
熊本大学YMCA◎	九州ルーテル学院大学YMCA
中央大学YMCA	広島女学院大学YMCA
慶応義塾大学YMCA	尚絅学院大学
立教大学YMCA	大阪大学YMCA
清泉女子大学YMCA	神戸大学YMCA
国際基督教大学YMCA	広島大学YMCA
フェリス学院大学YMCA	弘前学院大学YWCA
同志社大学SCA	同志社女子大学YWCA
関西学院大学YMCA	福岡女学院大学YWCA
(上ヶ原キャンパス)	弘前大学YMCA

にした学生中心の活動です。現在は37の大学にあり、その内10大学では学生寮を運営し、約450人が参加しています。日本で最初に学生YMCAが設立されたのは1888年（明治21年）。以来130年余にわたって学生たちが集い、寮生活やサークル活動、聖書研究、海外プログラムなどを通して仲間と出会い、成長していく場となっています。

50回の節目を迎えた昨年のテーマは「小さな私、弱いあなた」暴力と戦争の世界を生きるために。世界には戦争・紛争で傷つき、命を落とす子どもたち、戦場に駆り出される若者たちがいます。日本社会でも、学校や教育現場での熾烈な競争やいじめ、若年層の自死と言った「暴力」があふれています。「大きくて強い」ではなく「小さくて弱い」、その視点から何か世界に希望と変化を導き出すことができるのでしょうか。そのような問題意識のもと、50名の参加者が3日間、寝食を共にしながら自由闊達な議論を交わし、学びと祈りを分かち合いました。

富士が見ている

17

YMCA東山荘所長

森田 義彦

今も昔も変わらぬ祈りの場

110年目の夏

人にはそれぞれ忘れられない景色があると思います。幼い頃に見た公園の池に落ちる夕陽や夏の海でキラキラと輝いていた海面など。それは自然の中で、ふとした時に会えることが多いかもしれません。

『東山荘100年の歩み』に

載せられているラウンドトップ（夕陽の丘）の写真も正にそういった絵になります。聖想・祈りの場として掲げられている富



士を臨む丘に、青年たちが集まり、交わり、語り合う場面です。富士より落ちる霞（かすみ）が深山幽谷を思わせる様相です。夏でも朝夕は少し肌寒い御殿場で、青年たちの熱が伝わってくる写真です。1935年の夏季学校とあります。

翌1936年の夏季学校のテーマは「我らに迫る神の聖意と伝道の責任」とされ、霊的な意味合いが強調されたと書かれています。今も「夕陽（せきよう）の丘」として存在する場所は多くの青年たちが集い、語り合ったままの姿です。年配の方が東山荘を訪れ、この丘と黙想館を回られる方がいらっしゃいます。そのような姿を拝見すると過去にこの場所を思いを語られたことがありかと想像されます。

多くの人々の思いが寄せられる東山荘、110年の歴史の中に関係できることを神に感謝して、これから向かい、皆で進みたいと思います。

東山荘・ICUゆかりの人々 ◇ひと言紹介◇

●河井道：恵泉女学園創立者。

ICU設立委員会実行委員の中心メンバーとして精力的に活躍。48年に認可された財団法人の理事も務めた。51年、短期大学の視察と総会出席のため訪米中、アメリカで難航するICU創立募金のため、遊説旅行を引き受け、多くの人々の心を引き付ける。かつて東山荘近隣には「恵泉の山家（やまが）」があり、河井先生の時代より修養会等が行われていた。

●神田盾夫：西洋古典学者。東大教授だったが定年を待たずに辞し創立されたICUへ。学問的貢献はもちろん、学生たちに大きな人格的な影響を与えた。多恵子夫人は御殿場にゆかりのある廣岡浅子さんの孫。東山荘の近くには長らく神田邸があり、現在も同跡地のマンションで学術親睦団体ペディラヴィウム会が活動を続けている。（今号の「東山荘と私」ご参照）

●エーミル・ブルンナー：スイスの著名な神学者でチューリッヒ大学の総長も務めたが、その職を辞しICUへ。赴任前、49年9月にYMCAの強い働きにより初来日、最初の1週間余りを東山荘で過ごした。「ヘゴテンバ」という合言葉は、われわれの間にまったく嵐のような記憶を呼び起こすのです。（「中略」思うに、あの数日間は私と日本との関係の基礎を作った期間であり、再度の訪日の誘因ともなったものです。それは本当に心温まる交わりであり、われわれの心を日本とすべての日本人に開いた日々だったのです」と後年、神田氏宛の手紙に記している。

●羽鳥又男：羽鳥玲子さんの義父（直之さんの父）。台北で海老名弾正の伝道説教を聞き信仰を持ち、台湾YMCAの活動に参加。以来台湾・日本のYMCA活動に貢献。四代にわたる台湾総督の側近で台南市最後の日本市長。戦時下にもかかわらず人種差別のない施策や歴史文化の保護等を行う。戦後は齊藤惣一の要請でICU設立にも尽力し初代庶務部長を務めた。

●ダーギン・ジョー：ニュージャージーYMCA主事だったが、19年東京YMCA名誉主事として着任。以来、日本のYMCAに生涯を捧げる。42年、戦争により帰米を余儀なくされるも、45年米国大使特別顧問として来日、翌年にはGHQ民間情報教育局青年部長に就任。ICU設立にも貢献。47年、オスロの世界YMCA大会には渡航不可であった日本人を代表して紋付羽織袴姿で参加した。

【編集後記】

今号では、YMCA東山荘110周年特集の一環として、戦後ICU創立の場となった「御殿場会議」を取り上げました。お時間を割いてご協力いただいた皆様、文章をお寄せいただいた皆様ありがとうございました。また、ICUアーカイブズの松山様には貴重な写真や資料をご提供いただき、恵泉女学園中学・高等学校の本山校長先生は河井道先生とICUとの関係資料をお送りくださいました。以下の文献も参照しました。

- ・海老沢義道『齊藤惣一とYMCA』（日本YMCA同盟出版、1965年）
- ・中沢治樹・川田殖編『日本におけるブルンナー』（新教出版社、1974年）
- ・武田清子『未来をきり拓く大学』（ICU50年史）（国際基督教大学出版局、2000年）
- ・YMCA史学会編『日本YMCA人物事典』（日本YMCA同盟、2013年）

これらの文献・資料を十分に活かしきれませんでしたが、皆様様に、この場を借りて厚く御礼申し上げます。ICU創立に至る経緯は決して一枚岩でなく、そこにも歴史的・文化的な文脈の中で様々な人間模様が見られます。今回はその一面の、ごく一部を切り貼りすることしかできませんでした。興味関心のある方は、ぜひ、上記書物等をご一読いただければと思います。今号の文責はもちろんすべて編集者にあります。（阪田）

【訃報】長年「年末年始家族パーティー」に参加されていた中村順子さん（福岡）、飯野毅与志さん（東京）が天に召されました。御霊の平安とご遺族・ご関係の皆様の上に主の深い慰めをお祈りいたします。

お問い合わせ・お申込み

資料の請求はこちらまで

YMCA東山荘

〒412-0024 静岡県御殿場市東山1052

TEL 0550-83-1133 FAX 0550-83-1138

E-mail: tozanso@japanymca.org

ホームページ www.ymcajapan.org/tozanso